



Title	ネガティブな出来事について
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 163-177
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネガティヴな出来事について

柏端 達也

日常われわれが「タイプライターは机から落ちなかつた」、「結局昨日彼から電話はかかつて来なかつた」、「その水が凍らなかつたのは、きっと何か不純物が混入したからだ」、「七時に目覚まし時計が鳴らなかつたので…」などと言うとき、あるいは歴史家が、軍事衝突に至らなかつた理由や政策的な不介入がもたらしたもの、ある思想が特定の文化圏で流行しなかつた原因などについて語るとき、「ネガティヴな出来事」とでも言うべきものが問題となつてゐるようを見える。

しかし一方、それらを出来事と呼ぶには当惑が感じられることもたしかである。タイプライターの落下といった場合と比べて、さらにはある国家体制の崩壊といった場合と比べても、ネガティヴな出来事においては“実際何も変化していない”ように思えるからである。われわれはこの当惑に素直に従つて、ネガティヴな出来事は正

真正銘の出来事ではないとすべきなのであらうか。すると、因果関係は出来事の間の関係であるとか、歴史家は過去の出来事を叙述するとかいった広く受け入れられた見解に修正を施さなければならなくなるか、そもそもばネガティヴな出来事に関わつてはいくつもの言明を、因果言明や歴史叙述としては不完全なもの、あるいは多岐の言明を、逆にもしこの当惑が一種の錯覚や偏見であるとするなら、出来事とは變化であるというこれも広く受け入れられた見解にいくらか但し書きを加えた上で、その当惑がいつたいどこから来るものであるのかを明らかにしなければならないだろう。第二の選択肢をとるべきだと私は思う。以下では、その方向に沿つてネガティヴな出来事を論じることにする。

哲学史にとつてネガティヴな出来事はなじみのない奇妙な概念ではない。ネガティヴな出来事に対する言及は、そのような名で呼ばれているとはかぎらず、しかも断片的にではあるが、いくらか見い出すことができる。しばしばネガティヴな出来事は、風変わりな因果説明の一部を構成するものとして、あるいは因果性についての一

他方、耳栓をさせる」とで船員達をセイレーンの歌声の誘惑から守った場合、「彼らがセイレーンの歌声に応えなかつたこと（Their not answering the Sirens' chant）」はネガティヴな出来事であるが、その基礎行為に対する関係はより複雑である。ネガティヴな出来事を特定の観点から分類することは可能であり、そうした概念の整理は有益なものであらう。だがダントンの分類をここで一つ一つ検討することはしない。行為と密接に結びついたネガティヴな出来事の分類なら、次に述べるG・H・フォン・ウリクトの観点に従つた方が、より明解なものを得られるからである。

まったく形で話及されることが多いのは行為論の文脈である。以下ではその数例を取り上げる。そうするにしたが、いわゆる「ネガティヴな出来事」が具体的にどのようなものであるかを、より明確にできるだろう。

アーサー・ダントは行為論を開拓する中で、「Xは起」のなかつた(X did not happen)」と「不-Xが起」(not-X happened)」の区別を強調している。⁽²⁾彼によれば後者は前者を含意するが、その逆は成り立たない。後者は「ネガティヴな出来事(negative event)」の生起を表しているのである。ダントの関心は「行為として」ある

ウリクトは、出来事を（出来事と呼ひうるもの全ではないにせよ、その主なタイプを）状態の順序対として分析する。出来事とはある状態からある状態への変化であり、変化はさらに、状態の消滅といった要素的なものへと分析できる。彼によれば $pT \rightarrow k$, $\sim pTb, pTb, \sim pT \sim p$ の四つが要素的な変化すなわち出来事であり、それら四つは互いに排他的で、かつその四つに尽くされる。四つの中には pTb および $\sim pT \sim p$ の形のものが含まれることから明らかであるが、ウリクトのいう変化とは不変化をも含む広い意味での“変化”である。⁽⁴⁾

いは「行為において」生起するネガティヴな出来事に集中しており、彼はそれらを「基礎行為 (basic action)」との関連からべつのかのタイプに分けている。たとえば、腕を上げるよう命令された人がそれに逆らった場合の「腕を上げなかつた」と (his not raising his arm)⁽³⁾ は、基礎行為として生起したネガティヴな出来事である。

ウリクトが不変化を出来事のカテゴリーに含めた理由は、多分に形式的なものである。また出来事のこの分析も、行為および（義務や許可といった）行為の指令の分析という特定の目的を背景としたものである。だからネガティヴな出来事そのものにウリクトの関心があるわけではない。だが彼の^{システム}体系は（とくに行行為に関連した）ネガ

ティヴな出来事を扱うことになる。彼は、行為において為された不変化、すなわち行為の成果としての不変化について述べている。⁽⁵⁾ 成果が不変化であるような行為は、彼の体系では大別して二種類である。第一に p を保存したり p の発生を阻止したりする行動がある（彼の表記法ではそれぞれ $d(pTp)$ および $d(\neg pT\neg p)$ ）。タイプライターが机から落ちなかつたことは、タイプライターを机からずり落ちさせないという行動の成果でありうる。したがつてそれは、ウリクトに従うなら、れつきとした出来事たりうるのである。第二に、 p を消去したり産出したりすることの差し控えがある ($f(pT\neg p)$ および $f(\neg pTf)$)⁽⁶⁾。パスポートを取り上げられなかつたことは、パスポートを取り上げるのを勘弁するという差し控えの成果といふネガティヴな出来事でありうるのである。

ところでウリクトは出来事と行為をカテゴリー上厳格に区別しているのであるが、⁽⁷⁾ いでは端的に行為を出来事として扱つてもかまわないと思われる。この点に関しては彼の言葉使いにこだわらないことにしよう。すると差し控えは端的に出来事であると言つてよいことになる。よつて、たとえば挨拶を差し控えることもネガティヴな出来事である。⁽⁸⁾ また、 p の保存や抑止の差し控え ($f(pTp)$ および $f(\neg pT\neg p)$) も成果はネガティヴでないものの、その行為自体はネガティヴな出来事であると言うことができる。タイプライターが落ちるにまかせて何もしなかつたことは、ネガティヴな出来事なのである。

行為の差し控えは、ギルバート・ライルが「ネガティヴな『行為』

(negative 'action')」と呼んだものの主要な部分を成している。彼によればそれは、「ある」とをしているときにしていない無数に多くの他の「こと」と明確に区別される。「差し控える」、「取りやめる」、「無視する」、「田」ぼしする」などは、それらが意図的に為される」とあり、非難や賞賛などの対象になると云ふかぎりで、そして、特徴的な仕方ではあるがとにかく時間的に限定されているといふかぎりでは、まさに行爲に分類してよいようである、とライルは述べる。⁽⁹⁾

以上の論者はそれぞれ異なる脈絡でネガティヴな出来事を扱つてゐるが、行為との関連で論じてゐる点では共通してゐる。そのようにしばしば行為との関連で論じられるといふのは、ネガティヴな出来事の一つの特徴である。しかしそれは傾向であつて本質的なことではない。以上にあげたような仕方では行為と密接に結びついていないネガティヴな出来事を考へることは可能である。

ダントがネガティヴな行為でないとしたケースは、そのまま、行為ではないネガティヴな出来事の例になつてゐる。ダントが述べるように、ある人が命令を理解しそこなつて腕を上げなかつた場合や命令に従おうにも腕を上げる能力を失つていて腕が上がらなかつた場合、腕を上げなかつたことはネガティヴな行為ではない。しかしそれは、腕が胴体の両側に下がつてゐるほんどの場合われわれはネガティヴな行為を遂行していないといふような意味で、そうなのではない。⁽¹⁰⁾ 命令が理解できなかつたりして腕を上げなかつたことはネガティヴな行為ではないが、それでもやはり命令が存在したそ

文脈においては、ネガティヴな出来事と言えるのである。(この場合「彼の腕が上がらなかつたこと」と記述した方が誤解を招きにくいかもしれない。)

さらに、そのような行為の「失敗」にすら関わっていないネガティヴな出来事も考えられる。たとえば「スプリングラーの不作動が火事をひき起こした」と言うとき、当然のことながらわれわれは、そのスプリングラーの不作動を成果とするような行為を念頭に置いているわけではない。単に認識上の問題ではなく、実際そのような対応の行為は存在しないかもしないのである。

2

行為と密接に結びついたものが注目されるという傾向の他に、ネガティヴな出来事の論じられ方を特徴づけていることがある。ネガティヴな出来事を正真正銘の出来事と言い切ることへの当惑、あるいは躊躇である。そしておそらくこちらの傾向に、より注意する必要がある。

ライルは結局「ネガティヴな『行為』」を正真正銘の行為とすることをためらつた⁽¹⁾。ウリクトもある論文の中で、*„TへかどへTへだ* 分解できるものこそが、状態からへの変化のうちで「純粹の」ものである、としている⁽²⁾。基礎行為の一つにネガティヴなものを数えあげたダントでさえ、あるタイプのネガティヴな出来事の「奇妙さ」を口にしている⁽³⁾。この傾向はある程度健全なものであると言え

る。ネガティヴな出来事の「奇妙さ」は日常的な感覚としてわれわれに共有されているものであろう。しかしその感覚はときにネガティヴな出来事の扱いに偏りを与えることがある。そのような場合それは、出来事の概念に対するより広範囲に影響力をもつたある先入観と結びついているのである。

それを見るためにライルの議論を追つてみよう。ライルの議論は「ネガティヴな『行為』」を行ふと呼んでよいか否かをめぐって展開されている。彼は、そのように呼んでよいと思われる理由を前述のとおりいくつかあげているが、それ以上にそう呼ぶべきではないと思われる理由を熱心にあげている。彼によれば、「ネガティヴな『行為』」には熟練がないし、その遂行に特有の道具も材料も要しない。また(ライルはこちらの論拠をより重視しているようであるが)「ネガティヴな『行為』」には、特有の下位行為が存在しない。たとえばわれわれは辞表を作成することにおいて文字を記し、文字を記すことにおいて紙にインクを付着させるが、挨拶を差し控えることは挨拶を差し控えることでしかない。たしかに挨拶を差し控えるとき、われわれは代わりに他の何事かを——たとえば目の前の料理を黙々と食べ続けたり——することになろうが、挨拶を差し控えるために特有の下位的な何かをする必要はない⁽⁴⁾。こうして彼は最後まで「行為」に付けられた引用符を外さなかつた。

しかし為す術を知らないかたり、必要な道具や材料が入手不可能であつたりするために為すことができないことは、それを差し控えることもできないという事実を考慮すれば、ライルの前半の根拠は

薄弱である。さらに、ネガティヴな行為がその下位にいかなる特有の行為も持たないというのも厳密には正しくない。われわれは、ミサイルの発射を取りやめることの下位行為として、ボタンを押さないことを為し、さらにその下位行為として、指を押し下げないといふことを為しうるからである。思うに「下位行為」と言ったとき、ライルは、その“底”に身体運動と同一視できるか、あるいはそれを本質的にともなう行為が存在することを前提としていたのである。だが、行為の概念の多様性を認め、様々な行為の間の重層的な関係やそうした層を成す「上位」と「下位」の行為の関係の多様性に目を向けさせてくれるライルの議論の展開からすれば、彼は最後に引用符を外すべきだったのではないだろうか。

ライルの態度は出来事に関してわれわれが抱きがちな先入観を反映したものであると思う。出来事とは物理的対象における実際の変化である、という先入観である。しかしこの「実際の」の意味合いは全く定かでない。以下で、ネガティヴな出来事もまた「実際の」出来事であるということを複数の点から示そう。

うだが、その差は程度的なものであり本質的なものではない。

まず「タイプライターは机から落ちなかつた」は状態に関する文ではない。それはタイプライターが無時制的に机の上にあると言っているのではない。「タイプライターは机から落ちなかつた」という文は、たとえば机が傾いたそのときのことについて何かを言つてゐるのである。また「タイプライターは机から落ちなかつた」は、少なくともある時点においてタイプライターは机から落ちていない状態にあつたと言つてゐるわけでもない。それは「一時間前にはまだタイプライターは落ちていなかつた」のような、現時点ではすでに生じているタイプライターの落下という暗示された変化の初期状態についての文とは明確に異なるのである。

タイプライターが机から落ちなかつたことは、まさに出来事の力テゴリーに対する仕方で時点が特定される、と言いたい。たしかに「昨日彼から電話があつた」に対して「かかつてきたのは昨日の何時何分ですか」と問えるのに比べ、「昨日彼から電話はかかつて来なかつた」に対しても「かかつて来なかつたのは何時何分ですか」と問うことができないように思える。しかしその差は表面的なものである。たとえば「三月の最後の日曜日に引つ越した」と言つたとき、引つ越したのは三月最後の月曜日ではなく日曜日であつたといふ程度には時点が特定されているものの、さらに「引つ越しは三月最後の日曜日の何時ですか」と問うことはできないかも知れない。

「引つ越しは三月最後の日曜日の何時何分何秒の出来事だつたか」と問うことはふつう馬鹿げている。たしかに引つ越しを、一つの出

来事というよりはむしろ一連の下位的な出来事から成る過程と見なして、より細密化されたレベルで期間を特定することもできるだろ。しかし、引っ越しが為された期間を厳密に特定しようとしても、

どの下位的な出来事を引っ越しに含めるかによって開始と終了の時点は大きく変動し、その境界を時間単位で特定することすらおそらく困難であろう。また引っ越しが為された期間を、引っ越しに属する下位の出来事が埋め尽くしているわけでもない。「三月の最後の日曜日に引っ越した」という文において、時点はたかだか「三月の最後の日曜日」に特定されているにすぎず、そしてそれ以上は特定できないかも知れない。ポジティヴな出来事であるからよりいつそう時点が特定されるということはないのである。

またネガティヴな出来事は、ポジティヴな出来事と同じように因果説明を構成しうるよう思える。六時における電池の抜き取りが、七時に目覚まし時計が鳴らなかつたことをひき起こしたのかもしれないし、昨日彼から電話がかかつて来なかつたことは、ある電話線事故の結果かもしれない。ある人が挨拶をしなかつたことは別のあらう人の憤慨をひき起こすかもしれないし、自動制御装置の不作動はシステムの暴走の原因になりうるだろう。因果性に関する何らかの一般理論を前提すれば、たしかにこれらを因果説明のクラスから切り捨てることができるかも知れない。しかしそれ、そうした理論の限界をこれらの例が示していると取るべきではないだろうか。

ネガティヴな出来事にはポジティブな出来事に比べて何か欠けたところがあると考えたくなる傾向は、否定文に特有の“限定の不充分さ”に由来するのかも知れない。文が知識を表現するという観点から、次のように言われることがある。すなわち、否定文は有用でかつ現実の事柄に関する真正の判断でありうるが、必要な知識へ到達するまでの前段階的な知識を表現するにすぎない、と。「スマスマ婦人の帽子は緑ではない」は、それが「スマスマ婦人の帽子は緑ではなくて、何か別の色である」と分析されるならば、「スマスマ婦人の帽子は赤である」といつたさらなる肯定文的な知識を得るために足掛かりである、というのである。⁽¹⁵⁾

ひょっとすると否定語を含む多くの文についてそのように言いうかも知れない。だが少なくとも、問題のネガティヴな出来事に関する文が（その多くは否定語を含むもの）そのような分析を受けつけないことはたしかである。「だから遅刻した」が後に続くような文脈において述べられた「目覚まし時計は七時に鳴らなかつた」という文を考えよう。その文が、「スマスマ婦人の帽子は緑ではない」が充分に限定されていないという意味で、限定されていないとは考えられない。それを、「目覚まし時計は七時に鳴らなかつた。七時ではなくて別の時間に鳴った」や「目覚まし時計は七時に鳴らなかつた。その目覚まし時計ではない別のものが鳴った」や「目覚まし

時計は七時に鳴らなかつた。鳴つたのではなくて別の動作をした」等に分析するのは、的外れである。その文は、たとえば「目覚まし時計は八時に鳴つた」という肯定文的な知識に至るための足掛かりではない（かりに実際八時に鳴つたとしても）。

ネガティヴな出来事に関する文が何らかの仕方で現実に関わるものであるとしても、それは必要な事柄を知るまでの前段階という形で関わるのではない。このことは、ネガティヴな出来事に関する否定文と他の多くの否定文との違いを示唆している。その違いは、ダントが「不-Xが起⁽¹⁾こった」を「Xは起⁽²⁾こらなかつた」から区別すること⁽³⁾で、また、ライルが「ネガティヴな『行為』」を「あることをして⁽⁴⁾いるときにしていない無数に多くの他のこと」と区別すること⁽⁵⁾で、示そうとした違いにほかならない。この違いは重要である。ネガティヴな出来事に関する文が、否定にまつわる哲学史上的諸々の（いくつかは不毛な）論争から切り離されるように見えるからである。⁽⁶⁾

ネガティヴな出来事に関する文が前段階的な知識を表現しているのないとすれば、それは何らかのすでに充分な知識を表現したものであるか、何も表現していないかのいずれかである。そして後者の選択肢を私はとらない。ネガティヴな出来事に関する文が、「美德は四角形ではない」といった種類の文でないこともまた明白である。⁽⁷⁾

5

いつたいどのようなときに出来事や変化は、まがいものであるとかにせものであるとか言われるのであろうか。にせの変化あるいはにせの出来事として知られるものに、ピーター・ギーチの指摘した「单なる『ケンブリッジ』変化 (mere 'Cambridge' change)」がある⁽⁸⁾。ソクラテスが（二十世紀に）ある新入生に尊敬されるようになる」とや、「5がある人の子供の数である」とをやめる」となどがその典型的な例である。これらをギーチは「にせものの」「『リアル』でない」変化とする。「リアル」な変化とそうでないものを区別する充分な規準をギーチが提出しているわけではない。ただ彼は、変化が「リアル」であるかどうかは、少なくとも、変化を被るとそれらの「現⁽⁹⁾実⁽¹⁰⁾性」の有無に依る、と考えているようである。すなわち「ソクラテスは、もし彼がすでに死んでいるなら、そして数も、数の場合はつねに、『リアル』な変化を被りえない」のである。⁽²⁰⁾ おそらく、例にあげた「单なる『ケンブリッジ』変化」は「リアル」な変化でないと言つてよいものであろう。そしてネガティヴな出来事が「单なる『ケンブリッジ』変化」でないことも明らかである。すでにあげたネガティヴな出来事の例には、故人も數も変化を被る主体として登場していない。ここまでは問題ない。

ジェグォン・キムは、ギーチの「单なる『ケンブリッジ』変化」を「ケンブリッジ出来事 (Cambridge event)」と「置き換え」て、

「リアルでない」「寄生的な出来事についてのより広範な議論を展開している。⁽²¹⁾ そこでもネガティヴな出来事がそのまま「ケンブリッジ出来事」の例であることはない。だがキムのような立場からすればネガティヴな出来事も、「ケンブリッジ出来事」が「リアルな出来事」や「リアルな変化」ではないとされたのとまさに同じ前提によって、「リアル」でないとされかねない。

しかしじつは、キムの「ケンブリッジ出来事」はギーチの「単なるケンブリッジ変化」とは別物である（少なくともキムが言うような「典型例」ではない）。そして「ケンブリッジ出来事」を「リアル」でないとする論拠には、議論の余地がある。キムやマイルス・ブランド⁽²²⁾があげる「ケンブリッジ出来事」の例は、ソクラテスの妻クサンティッペが未亡人になることや、ある人がおじになることなどであるが、直観的に言つてキムらの例はギーチの「単なるケンブリッジ変化」がもつ不条理さを欠いている。ギーチが考察したのは「変化」であり、その際変化を被るもののが何であるかということがつねに問題とされていた。ギーチは、死後何世紀も経つたある日ソクラテスがひとりの新入生に尊敬されるようになることが、ソクラテスの身の上に生じた変化としては「リアル」でないとついているのである。そしてもちろん、キムの例で、クサンティッペがソクラテスに比べて変化を被る主体として現実性を欠くということはない。ギーチは、キムが言うような「ケンブリッジ出来事」（あるいはブランドが言うような「関係的出来事」）を、キムがあげたような論拠に基づいて、「にせもの」であるとしたのではない。⁽²³⁾

「ケンブリッジ出来事」が「リアル」でないとするキムの論証は必ずしも理解しやすいものではない。生起した場所や「依存関係」に関する彼の議論は、特定の哲学的立場を前提としない限り、「ケンブリッジ出来事」の価値を下げるには論拠として薄弱である。⁽²⁴⁾ 「ケンブリッジ出来事」が因果説明を構成できないというのも納得したい。因果説明の主張可能性についてキムが考えていることは明確でないが、少なくとも法則化可能性が前提とされているようである。しかし個々の（単称の）因果説明がそのままでは法則化を見込めないということはむしろふつうである。「ソクラテスが毒杯を飲み干したので、クサンティッペは未亡人になった」に奇妙さが感じられるのはもちろんのこと、「ソクラテスによる毒杯の飲み干しとクサンティッペの未亡人化の間には因果関係がある」や「ソクラテスによる毒杯の飲み干しがクサンティッペの未亡人化を引き起こした」さえもあからさまに直観に反するとは思えない。

キムの結論の背景にあるものには目を向ける必要がある。ソクラテスが為した毒杯の飲み干しやソクラテスの身に降りかかった死といった、物理的対象の上に生じる「リアルな変化」こそが正真正銘の出来事である、とキムは考えた。そしてそのような「リアルな変化」のみが因果連鎖を構成するとしたのである。類似の前提、類似の先入観は、ライルの躊躇の中にもより控えめな形で見ることができた。そしてここでもまた「リアル」の中身が明らかでないのである。もし「リアル」と言うことに意味があるとすれば、ネガティヴな出来事に関しては、むしろ次のように言うべきであろう。ポジテ

イヴな出来事もネガティヴな出来事もともに“リアル”であるか、ともに“リアル”でないかのいずれかである。

6

キムは、クサンティップの未亡人化のような出来事はソクラテスの死に対して「寄生的」であると述べている⁽²⁾。クサンティップの未亡人化を「寄生的」と言うことの意味はともかく、それに対応する

ソクラテスの死のような誰にも文句のつけようがない正真正銘の出来事の存在が、そのように言うことを可能にしている。もしもネガティヴな出来事が属する「出来事の階層構造」の「より基礎的な」ところに、つねに、ソクラテスの死のような紛れもないポジティブな出来事があるのなら、ネガティヴな出来事もまた「寄生的」であることになろう。問題はアンスコム＝デイヴィドソン的な出来事観に従った言葉使いで表現しても同じである。すなわちかりに全てのネガティヴな出来事をポジティヴな出来事として記述し直すことができたら、ネガティヴな出来事は、出来事の単なる風変わりな仕方による記述にすぎないということになってしまうだろう。つまり“ネガティヴな出来事”という出来事の種類があるのでなく、そのような種類の出来事の記述にあるにすぎないことになるだろう。

たしかに、ある試験に及第しなかったことは、その試験に落第したことにはならない。特定の試験に及第しなかったと述べることは、その試験を受けたということを含意せずには不可能であろうか

ら、及第しなかったことは即座に落第を意味するのである。しかしこのケースは例外であり、ここで扱っているネガティヴな出来事からは除外すべきであろう。ネガティヴな出来事が一般にこのような仕方でポジティヴな形に言い換えられるとは考えられない⁽²⁾。むしろライルの指摘が示唆するように、下位に——すなわち「より基礎的な」ところに——ポジティヴな出来事をもたないのがネガティヴな出来事なのである。

ただし逆の方向への言い換えが考えられる。つまり今年クリスマス・ツリーを飾らなかつたことを、毎年クリスマス・ツリーを飾るという習慣の廢止として再記述することはできないだろうか。同様に自動制御装置の不作動を、それまで必要なときには正常に働いていたという実績の消滅と言い換えることはできないだろうか。この場合、不変化（ネガティヴな出来事）はより上位の変化（ポジティヴな出来事）として再記述されることになる。さらに、昨日彼から電話がかかって来なかつたことを、彼が約束を破つたことと言い換えることはできないだろうか。こうした提案は魅力的なものに見える。全てのネガティヴな出来事には、計画が破綻することや、期待や懸念や予想に反すること、命令や規範に背くこと等が伴われているように思えるからである。ネガティヴな出来事は非常に広い意味での期待の破綻として再記述できるのだろうか。いずれにせよこの言い換えが、ネガティヴな出来事は寄生的であるとする見解に有利に働くことはない（電話をかけないことによって約束を破るのであって、その逆ではないのだから）。そしてそれは期待という新たに

説明を要する概念を持ち込んでいる点で、ネガティヴな出来事の本質をより明確にするものであるとも言えない。ただ、このように言い換えることで、ネガティヴな出来事が出来事やそれらの繋がりに對するわれわれの基本的な理解に関わっていることが明らかになるのである（それについては次節の最後でもう一度触れる）。

7

ネガティヴな出来事に関する文が否定文としては限定のされ方の点で例外的であるということ、ネガティヴな出来事が他の多くのポジティヴな出来事に比べて『リアル』さや、時間的な特定のされ方の点で「出来事」と呼ぶのに遜色がないということは、すでに示した。この節では結びとして、次の二点を指摘しておこう。

私は、ネガティヴな出来事とそうでないポジティヴな出来事との間にいはいかなる区別もないということを主張したいのではない。それらの間には、もちろん注目すべき違いが存在する（その違いはネガティヴな出来事が何か劣つたまがいものの概念であることを示すものではない）。われわれは適当な規約を受け入れるなら、いくらでも機械的に、些末な出来事を作り出すことができる。出来事を異なる状態の順序対と規定したなら、たとえば自分の身長を越える位置への左手の薬指の先端の到達といった“出来事”を、いかなる文脈に組み込まれることをも想定せずに考え出すことができる。だが、そのような仕方でネガティヴな出来事を作り出すことはできないと

思われる。これはネガティヴな出来事の特徴の一つであろう。そしてネガティヴな出来事の論じられ方の第一の傾向——行為との関連で取り上げられやすいこと——は、この点に関わっている。つまりその傾向は、特定の文脈から切り離してネガティヴな出来事に言及することの困難さ、あるいは不可能さの表れなのである。この“文脈依存性”は、ネガティヴな出来事がとくに寄生的であるということを意味しない。むしろそれは出来事一般を扱うわれわれのやり方に沿うものである。つまり言語活動においてふだんわれわれが「出来事」に言及するのは、原因を究明したり責任を帰属させたりといった特定の文脈においてなのである（顕著な場合、出来事は「事件」、「事故」と名指される）。注目すべきは、ネガティヴな出来事への言及が日常の会話や法の言説、あるいは歴史叙述の文脈において頻出するにもかかわらず、出来事に関する哲学的な一般理論では例外として扱われがちであるということである。

指摘すべき第二の点は、ネガティヴな出来事に注目することで、出来事のカテゴリーによってわれわれが世界を把握する営みの重要な側面に光をあてることができるという点である。ネガティヴな出来事は、出来事の“繋がり”についてのわれわれの理解に深く関わっているのである。

明確な因果法則を提出できないにしても、因果関係について口にする際、出来事の間の何らかの繋がりを、われわれはある意味でつねに想定していると言える。そのような出来事の繋がりは多種多様であるので、「因果関係」といった語を可能なかぎり広く使つたと

しても、その全てを因果関係とするのは適切でないかもしない。

そこには、「自然法則」を暗示するような規則性はもとより、慣習や、あるいは計画や約束や命令が与えるある種の期待などが含まれる」とだろう。「つねに想定している」という言い回しには注釈が必要である。そうした繋がりをつねに想定しているとしても、われわれはそれについてつねに意識しているわけでも、言及できるわけでもない。ある出来事の後にはあるタイプの出来事が続くであろうという期待は、ネガティヴな出来事という形でその期待が破られなければ、意識もされる」とも「期待していた」と言及される」ともないような「期待」であって一向にかまわないものである。

ネガティヴな出来事に遭遇することによって明らかになるようなその期待は、出来事の間の繋がりの把握に伴われるものである。そうなした出来事の繋がりの把握が、受動的な観察だけでなく、能動的な操作を通じて達成されるといふのは正しい。⁽³⁰⁾ そしてそれを達成する試行錯誤の過程の中で、われわれはネガティヴな出来事に——そういうでないポジティヴな出来事と全く同じ重要さで——不可避的に遭遇することだろう。この意味でもネガティヴな出来事は決して例外的な、付属的な、寄生的なものではない。むしろネガティヴな出来事の存在は、われわれが世界を出来事や出来事の繋がりによって把握している、あるいはしつつある、しようとしていることの証拠なのである。

注

- (1) D・トヘヴィドン著、*Essays on Actions and Events* (New York, 1980) 「行為と出来事」、服部裕幸・柴田正良訳、勧業書房、一九九〇年)において、彼自身の分析から例外的な（あるいはそう見える）因果説明として「スプリンクラーの不作動が火事をひき起こした」をあげている (*ibid.*, p.161 [111-16頁])。またS・竹口ヴィットは “Causal Judgements and Causal Explanations,” (*The Journal of Philosophy* 62 (1965), 695-711)において、C・J・トュカスが提出した原因があることの規準に対する反例として、「混合ガソリンで走るサークルのエンジンが止まったのは、運転手がオイルをガソリンに混入しなかったからだ」と頗る巧みなケースをあげている (*ibid.*, p.697)。

(2) Arthur C. Danto, *Analytical Philosophy of Action* (Cambridge, 1973), 附章参照。引用語句の記号の文字は変えた。左側に(3) おもねんじいで彼は端的に腕を上げなかつたのである。麻痺した腕を上げるために装置のペダルを踏まないことにこの命令に逆らつた場合が、基礎行為としてのネガティヴな出来事のケースではある。

(4) Georg Henrik von Wright, *Norm and Action* (London, 1963). いくつもかの章を参照。 $pT \rightarrow p$ における「 p 」や「 $\sim p$ 」は状態を表す。「 T 」は transition や $\sim T$ は transformation の頭文字で、その左側に書かれるのが初期状態、右側が終了状態である。ウリクトの言う「状態 (state)」は「タイプライターが机の上にある」のような静的なものであるが、「雨が降つてぶる」のような動的な「過程 (process)」も、状態と同様の仕方で出来事を構成できる」とが示唆されている。たとえば過程の開始と終了は出来事である。

(5) 「成果 (result)」はウリクトの独自の用語である。窓を開けるという行為の成果は窓が開くという出来事であり、行為と成果は内的に論理的につながっている。ちなみにその成果がひき起す新鮮な風の流入や室温の低下といった出来事は、その行為の「帰結 (consequence)」

と呼ばれる。行為とその帰結のつながりは外的な因果的なものである。パンクしなかつた」と「ネガティヴな出来事が、タイヤを取り替えるという行為の帰結としてもたらさせる」とあるかも知れないが、それはパンクを防ぐという行為の成果として再記述することができる。本論文において成果と帰結の区別を問題にする必要はないだろう。

(6) 日本語の「～る」どう言い回しは曖昧である。英語の that 節に相当するともされるが、本論文ではそれを、出来事を指示する（か）少なくとも指示するよう見える）単称名辞として使っていく。出来事を指示する単称名辞は、英語では典型的には定冠詞をともなう動名詞句として表される。

(7) 「*d* (*pTp*)」のよつた「*d*」がまた式な「*d*」の後の丸括弧内に表された出来事 (i.) の場合は *pTp* を成果とする行動 (act) を表す。

一方「*f* (*pT~p*)」は、*pT~p* を成果とする差し控え (forbearance) を表す。*f* (*pT~p*) ～～～*d* (*pT~p*) は同じではない。ウリクトの用語では、行動と差し控えの二つが行為 (action) の下位クラスを構成するのである。

(8) 挨拶のような行為に、ウリクトの分析はうまく適用できないと思われる（少なくともウリクトの説明からはどのように適用されるのか明らかではない）。こゝたゞののような状態の変化が成果として、挨拶すること（挨拶し始める）に対応するのであらうか。挨拶のような場合、成果ではなく行為そのものを出来事と見なされるべきでないであらう。この種の指摘はディヴィジョンによって為されてしまふ (op.cit., p.113 [1回] 計)。

(9) Gilbert Ryle, "Negative 'Actions,'" in *On Thinking* (Oxford, 1979), 105-119. ハイルは「待機する」、「休む」、「秘密にしておく」なども「ネガティヴな行為」に含めている。しかしそうした行為はハイルも指摘するように、しばしばきわめて長い期間にわたって為される。現

出来事というよりは過程のカテゴリーに関する言ひ回しの方がむしろよく使われるようと思われる。したがつて、待機する」とや休むことや秘密にしておくことは、ネガティヴな出来事であるとしても、周辺的な事例と言えよう。といふで、ライルは変化の阻止について論じていない。「興味に欠けぬ」としてそれらを考察の対象から外している。もしライルが、行為によって達成されるのは單なる状態と「よりはむしろ変化（出来事）であると考えていたなら、変化の阻止はもう少し興味深いものとして扱われていたであろう。

(10) i.) の点でタバコの叙述はややミスコード・インクでもある (op.cit., p.172 参照)。

(11) Ryle, op.cit., pp.107-109 参照。

(12) von Wright, "Time, Change, and Contradiction," in *Philosophical Logic: Philosophical Papers Vol. II* (Oxford, 1983), p.125. 文脈を考慮する必要があるからねだ。ウリクトが論じてゐるのは時間の概念と変化の概念の密接な関係であり、たしかにその議論からすれば、変化を、連言が矛盾にならぬような状態の対立見なしとは重要である。

(13) Danto, op.cit., p.174.

(14) ただしハイルは後半で「下位的 (infra-)」という語をやや異なった意味で使つてゐる。すなはち彼は、ネガティヴな行為は否定という形で下位の行為に関わるとも述べるのである。

(15) 「時点」と言っても数学的な一点を指すわけではない。たしかに一般に出来事は時間的な広がりをもつた期間に生じると言うことをできるだらう。しかしそのように言つたとき、われわれはもはや事態を出来事として記述しているというよりは、開始という出来事と終了という出来事に挟まれた一連の過程として記述しているのである。端的に「因由」と述べられているようなときには、事態は出来事として記述されていると考えられ、その場合には「時点」の語を使うのが適切である（私は、ある「時点」に「生起した」と言うのが適切になるように「出来事」の語を使つてゐるが、それは不自然な規定ではない）。

と思う)。以上に関連して言えることは、本論文で「ネガティヴな出来事」として例示した事態が、出来事としてではない仕方で——過程や状態、あるいはそれ以外の非出来事的なカテゴリーによって——記述される可能性を私は否定しない(それどころか、あえてそのような仕方でネガティヴな出来事を処理することは、何らかの特定の目的にとっては有効であるかも知れない)といふことである。

(16) Rule, "Negation," in *Collected Papers*, Vol.2 (London, 1971), 1-11 参照。否定に対するこのした考え方は、ネガティヴな出来事に対してもライルに次のような主張をさせる。「ネガティヴな出来事の中身の無さは…存在や生起や遂行等の否定」一般のもつ「^{アントラジカル}本質的中身の無さ」の一特殊事例にはかならない」(*ibid.*, 1979, p.114, 強調はハイル)。しかしここでは、ライルのこのみの見解に満足するわけにはいかない。

(17) 否定一般に関する議論については A.N. Prior, "Negation" (in

The Encyclopaedia of Philosophy, London, 1967, 458-463) が、概観を与えてくれる(ただし「ネガティヴな出来事」への言及はないが)。たとえば《個々の否定文に対応する固有のネガティヴな事実の存在を認めると》そのようなネガティヴな事実は、つまらない意味で無数に存在する)ことになってしまうといった議論を、ネガティヴな出来事に關して考慮する必要はない。その議論は、結局、「文」と「事実」の「対応」に関する誤った考えを前提にしたものであると思われるが、いすれにせよネガティヴな出来事に関する文にそうしたタイプの議論は明らかにあてはまらない。いじやの議論で、目覚まし時計が七時に鳴らなかつた」といふネガティヴな出来事を認めたとしても、それが同時に、たとえば目覚まし時計が七時に象に踏まれなかつた」とや、七時に発光し始めた」とや、七時にジョーンズに買取られなかつたこと…等々までをも「ネガティヴな出来事」として認めることがならないからである(「目覚まし時計は七時に象に踏まれなかつた」や「七時に目覚まし時計は発光し始めた」などの文は真で

あるかも知れないが)。

(18) 「美德は四角形ではない」という文が何も表現していない、と断言すると反論があるかもしれない。その文は美德を形容するのに形の力コリーが不適切であることを示しているのであって無意味なものではないという反論である。しかしそれが「彼女のハンカチは四角形ではない」のような普通の否定文からかなり異なったものである)には変わりはない。

(19) Peter Geach, *God and the Soul* (London, 1969), V 章参照。「單なる"ケンブリッジ"変化」という奇妙な名称は、ケンブリッジにいたラッセルやマッタガートらが考えた変化の規準に由来している。彼らが考えていた(とギーチが言う)規準とは次のようなものである。すなわち《ある適當な解釈のゆえで、「 x 時に $F(x)$ 」が真で「 x 時に $F(x)$ 」が偽である」と言えるなら、その x は変化した》。ギーチの見解は、むしろ全ての変化がケンブリッジの規準を充たすのであってその逆ではないといふものである。そしてケンブリッジの規準こそ充たすものの変化とは言えないような「にせものの変化」を、彼は「單なる"ケンブリッジ"変化」と呼んだのである。

(20) *ibid.*, p.72.

(21) Jaegwon Kim, "Noncausal Connections," *Nôôs* 8 (1974), 41-52.

(22) Myles Brand, "Particulars, Events, and Actions," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory* (Dordrecht, 1975) 133-157, p.147 参照。ただ「 λ 」はギムの「ケンブリッジ出来事」を、「関係的な出来事 (relational event)」へ置き換え、もはやギーチの議論とは関連づけない点で、より慎重である。

(23) しかし、ギーチの「單なる"ケンブリッジ"変化」に多義性がないわけではない。彼は、ソクラテスの身長がテアイテスの身長より短くなることの「單なる"ケンブリッジ"変化」の一例としてあげているからである。なぜギーチがそれを「單なる"ケンブリッジ"変化」としたのかは明示されておらず、その例は議論の流れから遊離してい

る。ソクラテスの身長がティートスの身長より短くなることは、おそらくキムの言う「ケンブリッジ変化」であるが、キムがあげている他の例とは重要な相違点もあり、やむに区別して扱う必要があるものと思われる。

(24) キムは、ソクラテスの死とクサンティッペの未亡人化を同一と見なしえないような立場をとっている。だがそのような立場をあらかじめ取らないならば、それらを同一でないとする彼の論拠——生起した場所の違い——は説得力を欠く。われわれは出来事が生起した場所についての明確な規準を手にして、「とはとても言えないのだから、クサンティッペの未亡人化の生起した場所がソクラテスの死のそれよりも不明確であるとはとても思えないのである。また、同一性の主張がつねに取るに足らないものであるとは到底考えられない。するにキムが考えてくるように「区別できなん」といふのと、その主張の誤りがないことは、明らかである。

(25) 「出来事が「同」であれ」 *レーベル* *がドーカンだ* の文は因果説としての資格を「ソクラテスによる毒杯の飲み干しがソクラテスの死をひき起し」したと全く同等に持つべきものではない。

(26) キムは「リアルな変化」という概念を詳しく検討していないが、次のように示唆している。すなわち、「物体の中での変化」が「リアルな変化」なのではある、その最も自明なケースは「物体の構成における変化」である (Kim, *op.cit.*, p.51, 反用語句の強調はキム)。

(27) *ibid.*, p.48.

(28) いへじた如きはキムのものではある。「出来事の階層構造」では、それと密接に関連した「行為の階層構造」が対応してくる (*ibid.*, p.46 参照)。たとえば、ソクラテスの死を「たしかに」とはやめ、「トサハ」の未亡人化を「たしかに」とはやめ、「逆はできない」。その意味でクサンティッペの未亡人化はソクラテスの死という「より基礎的な」出来事に「依存」してくる。キムは加へ、「行為の階層構造」はアルヴィン・カールマンの「行為の樹 (act tree)」の考え方を

受けたものである。「ホールマンの加へ「行為の樹」では、非対称的で非反射的で推移的だが因果関係ではない、「よもやの関係 (by-relation)」で樹系状に結ばれたひとまとまりの行為群の構成である。(Alvin Goldman, *A Theory of Human Action*, Princeton, 1970, 参照。

たゞ、*同上* pp.47-48 にネガティブな行為への類似も及んでいるが、詳細には論じていない。)

(29) ある状態の発生が阻止された場合、たしかにその阻止の行動はボジョイケなどあるが、行為との成果は同一ではありえない。

(30) 因果関係の把握する際の行為や操作の本質的な役割については、たゞ *von Wright, Explanation and Understanding* (New York, 1971) 『説明と理解』、丸山高司・木庭伸夫訳、産業図書、一九八四年」の II 章参照。

文献

- Brand, M., and Douglas Walton (eds.), *Action Theory*, Dordrecht, D. Reidel Publishing Company, 1975.
- Danto, A.C., *Analytical Philosophy of Action*, Cambridge, Cambridge University Press, 1973.
- Davidson, D., *Essays on Actions and Events*, Oxford, Oxford University Press, 1980. 「第三編」『行為の出来事』、服部裕幸・柴田正聰訳、勧善書房、一九八〇年。)
- Edwards, P. (eds.), *The Encyclopaedia of Philosophy*, vol.2, London, Collier Macmillan Publishers, 1967.
- Geech, P., *God and the Soul*, London, Routledge and Kegan Paul, 1969.
- Goldman, A., *A Theory of Human Action*, Princeton, Princeton University Press, 1970.
- Govorov, S., "Causal Judgements and Causal Explanations," *The Journal of Philosophy*, 62 (1965), 695-711.

Kim, J., "Noncausal Connections," *Nôts*, 8 (1974), 41-52.

Ryle, G., *Collected Papers*, Vol.2, London, Hutchinson, 1971.

_____, *On Thinking*, Oxford, Basil Blackwell, 1979.
von Wright, G.H., *Norm and Action*, London, Routledge and Kegan Paul, 1963.

_____, *Explanation and Understanding*, New York, Cornell University Press, 1971. [『説明～理解』・木下龍司・木下英一訳・海螺図書・1974年刊]

_____, *Philosophical Logic: Philosophical Papers Vol. II*, Oxford, Basil Blackwell, 1983.